

# 《言葉は液体》のメタファー再考 — 日中対照の観点から —

韓 涛

## 1. はじめに

Lakoff and Johnson 1980 以降、メタファーは単なる言葉のあやではなく、認知方略の一種として広く知られるようになった。そして言語・文化が異なれば、同一の(抽象)概念を比喻化する際に用いられる認知方略も異なると考えられ、例えば Nomura 1996 や野村 2002 によって明らかにされているように、日本語と英語では〈言葉〉という同一の目標領域をメタファー化する際に、異なる認知方略が用いられている。

- (1)a. Try to pack more thoughts into fewer words.

[より多くの考えをより少ない語で(←語につめて)表現してみなさい。]

- b. Try to get your thoughts across better.

[自分の考えをもっと分かりやすく(←通るように)表現してみなさい。]

(Reddy 1979 日本語訳は引用者による)

- (2)a. 高窓から首を出した Q 少年は中庭の阿弥陀様に悪口の雨を降らせた。

- b. 老乞食は出水のときの走り水のような勢いでしゃべり出した。

(野村 2002:41)

例(1)(2)にみられるように、英語では〈言葉〉は〈個体〉として概念化され、話し手(ないし書き手)と聞き手(ないし読み手)におけるコミュニケーションは〈個体化〉された〈言葉〉のやりとり、具体的にいうと〈意味〉を〈言葉〉に入れた後、〈導管〉を通して相手に送ることを通して行われるのに対し、日本語では〈言葉〉は〈液体〉として概念化され、〈コミュニケーション〉と

いう概念は液体表現を通して行われることになる。

また、鈴木 2009 ではコーパスに基づき日英比較の観点から〈言葉〉を概念化する際に用いられる液体表現の種類と使用頻度が考察されている。種類については日本語の 28 種類に対して英語では 26 種類が用いられ、両言語には大きな違いがみられないものの、トークン頻度については日本語の 3.8%に対して、英語では 0.75%にとどまり、両言語には大きな開きがあるという結果が得られている。

本稿では従来の研究を踏まえて、動詞の種類に着眼し、日中対照の観点から《言葉は液体》のメタファーについて再考察する。具体的には、先行研究で用いられている日本語の動詞の種類を整理分類したうえで、これらに対応する中国語の液体表現がいかにかに〈言葉〉の概念化に用いられるかを検討しながら、日中両言語の相違点を明らかにしていく。

## 2. 先行研究の選定および分類基準

日本語における《言葉は液体》のメタファーを考察した先行研究がいくつかある中、本稿では以下の 2 つから、日本語の動詞を収集することにする。

- (a) 野村(2002)「〈液体〉としての言葉—日本語におけるコミュニケーションのメタファー化をめぐる」大堀壽夫(編)『認知言語学Ⅱ:カテゴリー化』東京大学出版会。
- (b) 鈴木(2009)「〈コミュニケーション〉の比喩表現:日英比較の観点から」『神戸言語学論叢』第 6 巻。

その主な理由は、上記の(a)(b)はいずれも豊富な事例をもとに日本語における《言葉は液体》を論じているという点にある。なお、収集された液体表現の動詞および筆者が補足したものを、Nomura 1996 で提案されている 4 つのサブメタファーを基準に、次のように下位区分した(表 1 参照)<sup>1</sup>。

---

<sup>1</sup>ただし「かける」のような〈個体〉も項としてとれる動詞(例:「看板をかける」)、「書き流す」「聞き漏らす」のような〈液体〉を項としてとれない複合動詞や「堰を切る」「(悪口の)雨を降らせる」などの液体表現の動詞句は今回収集の対象から除外した。そのうえで、先行研究では触れられていない動詞(例えば「発射する」など)を補足した。

下位区分	動詞の種類
(i) 〈言葉の産出は液体を発すること〉	あふれる(あふれ出す、あふれ出る)、浴びせる(浴びせかける)、かける(ぶっかける)、こぼす、こぼれる、絞る(絞り出す)、垂れ流す、流す、流れる(流れ出す、流れ出る)、ひねり出す、漏らす、漏れる(12種類)
(ii) 〈言葉の流暢さは液体の流れの速度〉	噴く(噴き上がる、噴き出す)、噴射する、ほとばしる(ほとばしり出る)、淀む(4種類)
(iii) 〈言葉の理解しやすさは液体の透明度〉	澄む、濁す、濁る(3種類)
(iv) 〈言葉の受け入れは液体の受け入れ〉	浴びる、吸収する、汲む(汲み上げる、汲み取る)、しみる(しみ込む)、浸透する、吸う、注ぎ込む、流す、飲む、漏らす(10種類)

【表1】 先行研究で用いられている日本語動詞の種類

表1から、日本語では〈言葉〉を概念化する際に用いられる液体表現の動詞はその分布が均衡ではなく、とりわけ(i)〈言葉の産出〉と(iv)〈言葉の受け入れ〉に集中していることが読み取れる。以下に、当該液体表現の動詞がどのように〈言葉〉の各側面を概念化しているか、その代表例をそれぞれ示しておく。

(i) 〈言葉の産出は液体を発すること〉

- (3) 「なんだか、うそみたいだ」ずっと黙っていた恭次がぽつりともらした言葉の意味が、泰子にはよくわからなかった。(角田光代『All Small Thing』)

(ii) 〈言葉の流暢さは液体の流れの速度〉

- (4) 式典の挨拶などで、予め書かれた挨拶文を見事に暗記し、滔々とよどみなく話す人の語りがしばしば、情報発信機械のように見えてしまうのは、そこには話し手の身体が感じられないからなのかもしれません。

<http://baby.educ.kyoto-u.ac.jp/shoko/blog/?p=1848>

(iii) 〈言葉の理解しやすさは液体の透明度〉

- (5) “詩一、それは限りなく澄んだ“濁った言葉”。何かが体内で疼き出し、そこから数

えきれない真実の言葉が舞い上がる。濁りながら織りなされた 詩の世界が、読む者の心をつかんで放さない。

<http://www.7netshopping.jp/books/detail/-/accid/1102462975>

#### (iv) 〈言葉の受け入れは液体の受け入れ〉

(6) ぼくが沈黙した意味を、ノゾミは正確に汲んでくれた。

(米澤穂信『ボトルネック』)

次節では上記の 4 つの下位区分を分析の枠組みとし、表 1 に示される日本語の液体表現に対応する中国語の液体表現がいかに関概念化に用いられているのかを検討していく。

### 3. 分析

#### 3.1 〈言葉の産出は液体を発すること〉

表 1 が示すように、〈言葉の産出〉を表すのに用いられうる日本語の動詞の数は(自動詞・他動詞のペアを含む)12 種類に上る。しかし、これらに対応する中国語の液体表現がすべて〈言葉〉の概念化に用いられるというわけではない。次の例(7)(8)が示しているように、中国語ではわずかに「流れる」「漏らす」「漏れる」に対応する“流”(“流出”)、“漏”が〈言葉〉を表すのに用いられうる<sup>2</sup>。

(7) a. 对答如流 [流れるようにすらすらと受け答える]

b. 这话, 也许真是从他的心底流出 (CCL)

[この話、もしかして本当に彼の心の底から流れ出たものかもしれない]

(8) a. 漏了一点儿雨 [少し雨漏りをした]

b. 漏了一句话 [言葉が漏れた]

---

2 興味深いことに、日本語の自動詞・他動詞のペア、例えば【流れる・流す】が〈言葉〉の(水)の観点からの比喩化に関して同様に振舞う(例えば「水/言葉が流れる」「水/言葉を流す」)のに対し、中国語の“流”は自動詞のときと他動詞のときは異なる振る舞いをみせる。他動詞として用いられる際に、例えば“流了一滴泪[一粒の涙を流した]”/\*流了一句话が示すように、“流”は(水)しか項としてとることができない。このように、厳密的にいうと中国語の液体表現“流”が対応しているのはあくまで日本語の自動詞「流れる」の方であると考えられる。

一方、残りの9種類の動詞に対応する中国語の液体表現はいずれも〈言葉の産出〉を表すのに用いられない。以下、その代表的なものとして【あふれる(あふれ出す、あふれ出る)】と【浴びせる(浴びせかける)】の2つを取り上げて詳しくみる。

### 3.1.1 【あふれる(あふれ出す・あふれ出る)】

次の例(9)が示すように、日本語の「あふれる」は〈液体〉と〈言葉〉のいずれも項としてとることが可能である。例(10)は実例である。

(9) 涙/ねぎらいの言葉があふれる

(10)a. 彼が捕われの身であった、当時の牢獄というものは、今日の刑務所とは異なつて、不衛生であり、その上苦しい刑罰が待っている所でありました。しかし、そういう中で、彼から、「喜びましょう」「喜びます」という言葉が繰り返し、繰り返し、溢れるように出て来ているのは、真に驚きに値します。

<http://shalom.holy.jp/book/n-page/index12.html>

b. 「どうしてわかるのですか ゆめのように なつかしいです はなせたころのことが」両親や友人の介助があれば、ペンで文字を書くことができることも分かった。11年もの間、閉ざされていた中島さんの言葉が、一気にあふれ出した。

<http://inochi-network.seesaa.net/archives/201303-1.html>

c. 入社から半年ほどたち、自分を表現したい、小説を書きたい——との気持ちが徐々に膨らみ、プロのコウンセラーに相談を持ち掛けた。返ってきたひとは「まずは詩でもいいから思ったことを書いてみたら」。そのヒントで筆を執ると、堰(せき)を切ったように言葉があふれ出し、一日であつという間に五十編余りの詩ができた。(『中日新聞』朝刊 1995/3/7)

これに対して中国語の“溢”“溢出”は次の(11)(12)が示すように、〈液体〉が問題なくその項になれるものの、〈言葉〉が項になるのはきわめて難しい。

(11)a. 罐子里的水(不停地/一个劲儿地)往外溢

[かめから水が絶えず外へ溢れ出る]

- b. <sup>??</sup>嘴里的话(不停地/一个劲儿地)往外溢
- (12)a. 从嘴里溢出一口奶  
[乳が口から溢れ出た]
- b. <sup>??</sup>从嘴里溢出一句话

一方、通俗的理解とはいいがたいが、《言葉は液体》を表す具体例が少ないながらも中国語にみられるのも事実である。

- (13)a. 有些话你不必当真, 但再不说就该溢出来了  
[君はこういう話を気にしなくていいが、しかし話さないと溢れ出てきそう]  
<http://tieba.baidu.com/p/1482511577>
- b. 薛恒双眼直盯着前方,嘴里慢溢出极不自然的话语……  
[薛恒の両目は前を見つめ、その口から大変不自然な話がゆっくりと溢れ出た……] <http://big5.qidian.com/BookReader/vol,2964635,7920847.aspx>

しかし注意すべきは日本語のケースとは異なり、《言葉は液体》を表す中国語の具体例の数が非常に少ないという点である<sup>3</sup>。そのため、上の例(13)のようなメタファー表現は中国語において十分定着しておらず、新奇なメタファー表現である可能性が高い。

### 3.1.2 【浴びせる(浴びせかける)】

次の例(14)からわかるように、日本語では〈言葉〉は〈水〉のように「浴びせる/浴びせかける」ことができる。このことはさらに、例(15)のような実例からも窺える。

- (14) 水/罵声を浴びせる/浴びせかける
- (15)a. これだけのことを思ってなければ、僕が君に向かってこんな赤面ものの讃辞を  
滝のように浴びせかけるわけではないってことくらいはさすがの君も分かってくれるんじゃないかな、そうだろ？(KOTONOHA)
- b. この熱血型に扇動されてしまう聴衆も確かにいる。しかし、戦いになると、その

---

3 筆者が検索エンジン「百度」(<http://www.baidu.com>)を使って“話”と“溢出”の共起について調べたところ、得られた具体例は例(13)と“这句话从心中溢出”(歌のタイトル)のわずか3例だった。

熱血はその後の冷静な一言で覆される。「で、おっしゃりたいことは何？」言葉を勢いよく全身に浴びせるより、そっと忍び込み、相手の急所のみを短剣で突く。どっちが、家に帰ってもまだジワーツと効くか、はいわずもがな。

<http://home.att.ne.jp/green/ma22/toudai-uenonikenka.htm>

一方、日本語とは対照的に、中国語の“泼”や“浇”の目的語になれるのは「水」のみである。これは、“泼了他一头脏水[彼に頭から汚い水をかぶせた]/\*泼了他一头坏话”という統語テストの結果や次の日中対訳からも理解できる。

- (16) 罗斯托夫认为这种玩笑, 简直是侮辱, 他怒不可遏, 对那个军官说了一堆听来刺耳的话。[ロストフは、この類のジョークはまったく侮辱そのものだと思っている。彼は怒りをおさえられず、あの将校に辛らつな言葉を浴びせかけた。]

(列夫・托尔斯泰《战争与和平》 日本語訳は引用者による)

上記の日中対訳が示すように、日本語の「言葉を浴びせかける」を表現するのに中国語では“说了一堆话”のような表現が用いられるが、液体表現ではない。また、中国語には「罵詈雑言を浴びせる」の意味を表す“狗血喷头”という液体表現が存在するものの、日本語との相違点もみられる。例えば日本語では「罵詈雑言を浴びせられる」といった統語的操作が許されるが、同様の操作は中国語においては認められない(例えば“??狗血被喷了一头”/“??被喷了一头狗血”)。ここからもわかるように、日本語とは違い、中国語の“狗血喷头”は固定的な言い方であるといえる。

### 3.2 言葉の流暢さは液体の流れの速度

表1が示すように、日本語には〈言葉の流暢さ〉を〈液体の流れの速度〉の観点からメタファー的に理解可能な4種類の液体表現がみられる。このうち、【噴く(噴き上がる、噴き出す)・噴射する・ほとぼしる(ほとぼしり出る)】は〈流暢な言葉の産出〉を表しているのに対し、【淀む】は〈滞る言葉の産出〉を表していると考えられる。次の例(17)は前者の具体例に該当し、例(18)は後者の具体例に該当する。

- (17)a.「落語をしゃべっている時が『今、生きてるな』って感じ」とクールな語り口の中に

も熱い一面をのぞかせる三三。高座では滑舌よくよどみなく言葉が噴射する。

(『中日新聞』夕刊 2013/6/8)

- b. 張り詰めた緊迫感が臨界に達しようとするとき、堰を切ったように言葉が迸り出る「あんちゃん」「おじさん」「とうちゃん」。

[http://www.gokoku.gr.jp/junpai/source\\_005-1.html](http://www.gokoku.gr.jp/junpai/source_005-1.html)

- (18) 歴史的な敗北となった山花委員長は東京・永田町の党本部で記者会見、表情をこわばらせながら頭を下げた。(中略) 日ごろのどうとうした語り口がよどむ。  
(『中日新聞』朝刊 1993/7/19)

注意すべきは、〈言葉の流暢さ〉に関する上記の区分は言語形式の側面にも現れているという点である。例えば例(17b)の『あんちゃん』『おじさん』『とうちゃん』という部分から言葉が口から勢いよく流れ出た様子が容易に想像できる。

これに対して次の例(19)(20)が示すように、中国語では〈液体〉の観点から〈言葉〉について理解し語れるのは前者、すなわち〈流暢な言葉の産出〉の場合のみである。

- (19) 希特勒一改常态, 滔滔不绝地将一肚子话全倾斜了出来(CCL)

[ヒトラーはいつもの態度を変え、よどみなく思っていることを全部語った。]

- (20) 许大雷那些不服气的话从嘴里喷出,像架在堡垒上的机关枪,噼哩啪啦的扫射个不停 [許大雷は悔しそうな話が口から噴出し、まるで要塞に備え付けられている機関銃のように「バシバシバシバ」と打ちまくっている]

<http://www.19lou.com/forum-26-thread-15801361629641938-1-1.html>

そもそも日本語の「淀む」に対応する中国語の液体表現は“淤塞”である。しかし中国語において“河水淤塞”[川の水がよどむ]が問題なく成立するものの、“\*话语淤塞”のような表現は成立しない<sup>4</sup>。

4 中国語の中には“语塞”という表現があるが、これは(“如鯁在喉”[喉に刺さった棘の如く])という意味に近いから)《身体部位は言葉を入れる容器》のメタファー表現であって、《言葉は液体》のメタファー表現ではないと考えられる。また、「言いよどむ」に対応する“吞吐”も“把这颗枣/这句话吞下去,又吐了出来”[棗/言葉を飲み込んでまた吐き出す]のような表現が問題なく成立するということからわかるように、液体表現であるとはいえない。同様のことは日本語の「のむ」(例:「要求をのむ」)についてもいえる。大石2006:277では鈴木1973の主張を踏まえ、「のむ」は「英語の drink とは異なり、摂取する対象の形状や性質に関する制限が弱く、液体、気体、固体のどれについても「のむ」といえる」と述べられている。

このように、〈流暢な言葉の産出〉が〈液体がさらさらと流れること〉を通してメタファー化されうるといふ点において日中両言語は軌を一にするが、〈液体〉の観点から〈滞る言葉の産出〉を概念化することができるか否かに関しては振る舞いが異なる。

### 3.3 言葉の理解しやすさは液体の透明度

表1には、日本語において〈言葉の理解しやすさ〉を概念化する際に用いられうる3種類の液体表現が示されている。このうち、元来液体の透明な状態を表す「澄む」は〈言葉の理解しやすいこと〉を、液体の濁っている状態を表す「濁す」「濁る」は〈言葉の理解しにくいこと〉をそれぞれメタファー的に表すことができる。

(21) a. 併し、長い歳月の間には、いつか濁った水が澄んでゆくように、孔子のお詞なるものの流れも、いつか夾雑物は沈み、孔子のお詞だけが、澄んだ流れを造ってゆくことであろうと思います。(野村 2002:45)

b. この日、西川社長は、(中略)「反省すべき点は反省し、これからも改革を続けて行くのが私の責務だ。その中で自分のけじめも考える」と発言した。これを受けて記者が「けじめとはどういう意味か」と質問すると、西川社長は言葉を濁したため、記者がもう一度「けじめとは辞任も含めてか」と質問すると、西川社長は無言で下を向いた。この様子が「うなずいた」ように見えたため、記者が「質問に対して、うなずかれた、と判断していいか」と確認すると、西川社長は質問した記者を睨みつけ「失礼なことを言うな！誰がうなずいたんだ！」とホールに響き渡るほどの大声で怒鳴り散らし、一方的に会見を中止して立ち去ってしまった。

<http://kikko.cocolog-nifty.com/kikko/2009/06/post-1bdd.html>

例(21a)から、「孔子が言ったとされる言葉は本物と出所が不確かなものが混ざり合っ『濁って』いて、的確な理解を阻んでいるが、やがて本物だけが『澄んだ』流れをつくり、孔子の言わんとしたことの理解が可能になる」(野村 2002:45)ということを読み取ることができ、例(21b)から、「西川社長が言葉を濁したため、記者は目をくらまされ本人の真意をきちんと理解できなかった」ということが読み取れる。しかしここで注意すべきは、野村 2002 でも指摘されているように、例(21a)のような具体例はみられるものの、「言葉を濁す」と反対の意

味を表す言語表現は日本語に存在しないという点である(例えば「\*言葉を澄ます」や「\*言葉が清まる」はいずれも非文である)<sup>5</sup>。

これに対して「澄む」と対応する中国語液体表現の中には“清澈”がある。次の例(22)にみられるように、中国語では“清澈”が〈言葉〉の概念化に用いられる<sup>6</sup>。

(22) a. 怀特的文字清澈, 流利, 极具诱人的魅力。(CCL)

[ホワイトの文章は流暢でわかりやすく、人を引き付ける力をもっている。]

b. 郁达夫少年成名且学贯中西, 故而语言清澈如水 (CCL)

[郁達夫は若くして名を挙げ、しかも中国と西洋の学問に通じているがゆえに、その文章は透き通った水のように美しい。]

一方、「濁す」「濁る」に対応する中国語の液体表現“搅浑”“浑浊”はいずれも〈言葉〉の概念化に用いられない<sup>7</sup>。例えば「言葉を濁す」を表す際に用いられる“支吾其词”や“含糊其词”はいずれも液体表現ではない。この言語事実も傍証の1つとなりうる。要約すれば〈言葉の理解しやすいこと〉を表すのに、中国語では〈液体〉のメタファーが用いられるが、〈言葉の理解しにくいこと〉を表すのに液体表現が用いられないということである。

### 3.4 言葉の受け入れは液体の受け入れ

表1に示される10種類の動詞は、「液体としての言葉を能動的に受け入れるかそれとも受動的であるか」という観点から二分できる(Nomura 1996 参照)。次の例(23)(24)はそれぞれの代表例である。

(23) a. 打ち合わせでは、時に抽象的にしか回答できない私たちの言葉をくみとって、「こうしたほうがいいのでは？」など、その場でプロとしての意見をプランに反映していただいたので、安心してお任せすることができました。

5 しかし反対の表現がなぜ存在しないのか、その理由については野村 2002 では何も述べられていない。

6 ただし1つ付け加えなければならないのは、「澄ます」に当たる“澄清”は〈言葉〉の概念化に用いられないということである。これは“澄清事实/立场”[事実/立場をはっきりさせる]のような具体例が多くみられるものの、“??澄清语言”や“??澄清文字”のようなメタファー表現が CCL から観察されないというところからもわかる。

7 ただし“浑浊”は例えば“就在这时, 他听到了一声浑浊的咳嗽声”[そのとき、彼には濁った咳する声が聞こえた](CCL) のように〈音声〉を〈液体〉の観点から表すのに用いられる。しかしこれは(〈視角〉から〈聴覚〉への)共感覚比喩の具体例であって、《言葉は液体》のメタファー表現ではないと思われる。

<http://stap.co.jp/worksreform/599>

b. 花形は正直な子で、人の言葉を上手く流せないタイプ…

<http://www.pixiv.net/novel/show.php?id=2857848>

(24) a. 試合後、球場の外で同級生や先輩たちから「よくやった」「百点満点だ」と祝福の言葉を浴びた。(『中日新聞』朝刊 2013/7/15)

b. 『風たちぬ』を観て泣きました。(中略)「生きねば」という言葉が深く重く、しかしじんわりとあたたかく、体の奥に染み込んできました。

[http://www.aulovesghibli.com/sp\\_aftercontribution/li\\_431733/](http://www.aulovesghibli.com/sp_aftercontribution/li_431733/)

例(23)は言葉を「くみとったり」、「流したり」することによって〈言葉を能動的に受け入れる〉という意味を表し、例(24)は言葉を「浴びたり」、言葉が「染み込んできたり」することで〈言葉を受動的に受け入れる〉という意味を表す。また、例(24a)からわかるように、このとき言葉を発する側がカラ格でマークされており、これは聞き手がニ格でマークされている例(15a)と首尾一貫している。さらに、次の例(25)が示すように、このときの「能動」と「受動」は相容れない関係にあるのではなく、受動的に受けたものを能動的に取り入れていくことも可能である。

(25) 言葉のシャワーって聞いたことあるかな？(中略)こうやって、言葉を どんどん受け取ることを「言葉のシャワー」っていうんだ。言葉のシャワーを浴びて、でも、それをぜんぶただ流してしまってもったいないよね。浴びた言葉を自分に染み込ませることが大事なんだ。

<http://english.ume-review.com/?p=650>

これに対してこの10種類の動詞の中で中国語における〈液体〉としての〈言葉〉を表せるのは、「しみる」「注ぎ込む」「漏らす」にそれぞれ対応する“沁入”、“流入”、“漏”のみである。次の例(26)はその具体例である。

(26)a. 心里想着刚看过的书中言语这些满含着诗意的话, 沁入心脾。

(冰心《好梦》)

[心の中で先ほど本の中で読んだ詩的な言葉を考えていると、その詩的な

言葉が心に染み込んでくる。]

- b. 胡爷爷的话就像一股甘泉流入我的心田, 使我对未来充满了希望。(CCL)

[胡爺ちゃんという言葉はまるで一筋の泉のように私の心に染み込み、未来に対する希望を持たせてくれた。]

- c. “我不知道该怎么说, 很对不起你。”刘云接着说下去。

娄红拿开听筒后又担心漏了刘云的话, 连忙又把听筒贴近耳朵, 她听见了刘云的后半截话, “很对不起你”。(皮皮《比如女人》)<sup>8</sup>

[「何て言ったらいいかわからない。本当にごめん」と劉雲は話を続ける。

娄紅は受話器を耳から離れたが、劉雲の話を聞き漏らしてしまうのではと心配したので、急いで受話器を耳に当てたが、「本当にごめん」という劉雲の後半の言葉が耳に入った。]

一方、ほかのもの、例えば「浴びる」に対応する中国語の“浇”、“淋”といった液体表現は“浇冷水”[冷たい水を浴びる]、“淋雨”[雨に降られる]が問題なく成立するのに対し、“\*浇/\*淋谴责”とはいえず、“受到谴责”[叱責を受ける]のように〈液体〉のメタファー表現を用いずに表現するのである。同様のことは例(27)の下線部の中国語訳からも窺える。

- (27) それとお母さんは、息子さんが保育園の友達から「バカ」とか「うるせえ」という言葉を吸収したように思っているようですが、それはちょっと視野が偏っているかなと思います。(『中日新聞』朝刊 2011/4/22)

例(27)の「『バカ』とか『うるせえ』という言葉を吸収した」という部分を中国語に訳すと“学到「バカ」「うるせえ」之类的话”が適訳であり、ここにも〈液体〉のメタファー(表現)が入り込む余地がないのである。

#### 4. おわりに

以上の考察からわかるように、表1に示される日本語の動詞に対応する中国語の液体表

---

<sup>8</sup> なお前後の文脈からわかるように、“漏”の主体である“娄红”は話し手ではなく、聞き手である。ここから例(26c)は〈言葉の受け入れは液体の受け入れ〉の具体例であるとわかる。

現は日本語のように〈液体〉と〈言葉〉の両方を項としてとれるものが少なく、その種類は“流”（“流出”、“流入”）、“漏”、“傾泻”、“噴”（“噴出”）、“清澈”、“沁入”などに限られる。これは、Nomura 1996 で提案されている《言葉は液体》に関する4つの下位区分が日本語において1つの通俗的理解を形成しているものの、中国語においては通俗的理解にまで至っていないということを物語っているように思われる。今後は動詞の種類のみならず、動詞の使用頻度の観点から日中両言語における《言葉は液体》を考察し、上記論点の妥当性についてさらに検証していきたい。

### 主要参考文献

大石亨(2006)『『水のメタファー』再考—コーパスを用いた概念メタファー分析の試み—』  
『日本認知言語学会論文集』第6巻。

鈴木幸平(2009)「〈コミュニケーション〉の比喩表現—日英比較の観点から—」『神戸言語学  
論叢』第6巻。

鈴木孝夫(1973)『ことばと文化』岩波新書。

野村益寛(2002)「〈液体〉としての言葉:日本語におけるコミュニケーションのメタファー化を  
めぐって」大堀壽夫(編)『認知言語学II:カテゴリー化』東京大学出版会。

Lakoff, George and Mark, Johnson, 1980, *Metaphors we live by*, Chicago: University of  
Chicago Press.

Nomura, Masuhiro, 1996, The Ubiquity of the Fluid Metaphor in Japanese: A Case Study,  
*Poetica* (46).

Reddy, M, J, 1979, The conduit metaphor: A case of frame conflict in our language about  
language, A.Ortony (ed.), *Metaphor and Thought*, Cambridge University Press.

中国語用例出典: 北京大学中国语言学研究中心语料库(CCL)

日本語用例出典: 現代日本語書き言葉均衡コーパス(KOTONOHA)

